

# Alert

## 反天皇制運動

### 7 号

[通巻 389 号]

2017 年  
1 月 12 日発行

第 7 期・反天皇制運動連絡会

今月の Alert ●「代替わり」を問う一年のスタート

2・11 反「紀元節」行動に集まろう！——\*2

反天ジャーナル ●——まおう鳥、きょうごくのりこ、井上森\*3

状況批評 ●立憲主義と象徴天皇制——生前退位問題を契機として——中北龍太郎\*4

太田昌国のみたび夢は夜ひらく(80)

●何よりも肝要なことは「アジアとの和解」だ——太田昌国\*7

マスコミじかけの天皇制(07) ●「内閣と相談しながら」というコトバの政治的意味

——〈壊憲天皇明仁〉その 5——天野恵一\*8

書評 ●「リベラル派」のアキヒト天皇論——千本秀樹\*9

ネットワーク ●ゆんたく高江について紹介します。——ほしのめぐみ\*10

野次馬日誌——\*11 集会の真相——\*14 反天日誌——\*16 集会情報——\*16

「レディ・ガガの Love trumps hate のことなだけで...」と、ソウルの日本大使館そばの歩道に置かれた椅子に座った少女は呟く。「愛は憎しみに勝つ、でしょ？ なんか人気あるみたいね」。「阿呆なこと、言ってんじゃない」と風のように滑りこんで、空いたもうひとつの椅子に座ったのは済州島から飛んできたヨンドン・ハルマンだ。このばあさまは済州島に春を告げる小さな神さまである。「アガシ。妹みたいなのが、また釜山の日本総領事館前にできたな。チェジュからここに来る途中で見てきた」「そう。あたし、もう 50 人位いるらしいの。あっちこちに」。

「ふむ。しかし、ガガのあれでいちばん気になるのは NY 衛生局のトラックに乗ってたことだな。あれ、ゴミ回収車だろ？」。レディ・ガガの真意は知らんが、と貧乏人の味方であるハルマンは続ける。ゴミなのはむしろわしらだ。カネしか回収したことのない金持ち連中には、あんな皮肉は「へ」でもないだろう。あれは逆に、いつも回収・狩り込みに怯えるわしらにグサッと届いちゃったな、と。

だが、とハルマンは続ける。ゴミがゴミでしかいられないならゴミのままでいてやろうじゃないか。「アガシよ。おまえは単なる金属片だ。フクシマの放射能のように所有者のいない放置物のようなものだ」。そんな小さな合金の塊に、未来志向の者たちはまざまざと過去を読み取り、苛立ち、怯える。ココロの中を映し出すんだな。「へ？ 大使らの一時帰国だって？ あんたの妹は、トランクとかいう猿股野郎のそのまた禪担ぎどもにいい初夢を見せてやったよ。それこそ都市の異物、ゴミの真骨頂だ」。——と、もうハルマンの姿はない。春の準備に忙しいんだろう。

少女の隣の椅子にはもう誰もいない。あっちこちに 50 人いるなら、50 の席が空いている。(池内文平)



250 円

●定期購読をお願いします(送料共年間4000円)

●郵便振替 00140-4-131988 落合ボックス

東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 2A 淡路町事務所気付 落合ボックス

TEL/FAX 03-3254-5460 URL <http://hanten-2.blogspot.jp/> mail: [hanten@ten-no.net](mailto:hanten@ten-no.net)



今月の  
**Alert**

## 「代替わり」を問う一年のスタート 2・11 反「紀元節」行動に集まろう！

年末には「天皇の公務の負担軽減等に関する有識者会議」のおおよその流れが固まったと伝えられる。明仁自身は、退位ないし譲位を可能とし皇位の安定的継承をもたらす方向での、皇室典範など関連法規の大幅な変更を望んでおり、八月八日の「メッセージ」以降も、皇族たちや「友人」などにより明仁の意向が流されている。一月二三日発表の記者会見ではこれ以上に踏み込む内容は避けられ、「有識者会議」の結論を待つかたちになっているが、今月二〇日から六月一八日までとされる今回の通常国会会期中に、これを成立させることが、天皇の代替わり過程からも日程的に求められている。

安倍らは、トランプ現象によるあからさまにバブルな円安・株価上昇を後ろ盾にした、早期解散をも合わせてもくろんではいないが、とはいえ、そのようなスケジュールが、いかに暴力的な安倍政権下においても容易に実現できるとは考えられない。ましてや、「共謀罪」を新設する「組織犯罪処罰法」の改定までも、今国会に上程されようというのだ。右翼らが「皇室関係の法律を政争の中に置くな」と叫び脅迫する図も、いまから目に浮かぶようだ。

この腐敗しきった安倍の国家が、メディアと「世論」を支配するための道具として用いているもう一つの柱が軍事と外交政策だ。しかし、これも無惨としか言えない状況で、暴力と宣撫工作を拡大することのみ支えられ

ている。オスブレイの墜落事故は、沖縄・辺野古や高江への基地建設への怒りの正当性をかきりなく明確に見せつけた。一年以上にもわたって領土問題を宣伝したあげく、プーチン大統領に軽くあしらわれた安倍の宴会政治の失敗ぶりは、嘲笑をしか生み出せなかったばかりでなく、シリアなど中東の状況にも政府や外務省が無能無策であることを印象づけるものだった。鳴り物入りで訪れた真珠湾への「慰霊」とやはら、戦争をインチキ作家たちの生み出す「架空戦記」もどきにしか認識できていない安倍の醜態をさらけ出した。

一月二五日付で、各国の学者や専門家五三名により、「真珠湾訪問にあたっての安倍首相への公開質問状」が出されている。そこでは、真珠湾攻撃ばかりでなく、真珠湾攻撃に先立って行われたマレー半島をはじめ、アジア太平洋地域の他の地域への攻撃、そして何よりも中国や朝鮮半島における侵略戦争の責任をも問われているのだ。「公開質問状」は、「首相としてあなたは、憲法九条を再解釈あるいは改定して自衛隊に海外のどこでも戦争ができるようにすることを推進してきまして、これがアジア太平洋戦争において日本に被害を受けた国々にどのような合図として映るのか、考えてみてください」と結ぶ。ところが、これに対する安倍の「回答」は、じつに露骨なものだった。それこそが、米国防衛にも同席した稲田朋美防衛相による、帰国直

後の一月二十九日の靖国神社参拝であったと言えるだろう。韓国・釜山において、一月三〇日に設置された「平和の少女像」に対して、居丈高に吠える菅官房長官や外相らは、日本国家の侵略戦争への責任や歴史問題が、ますます重大なものとなっていることを世界中に印象づけた。それはまた、天皇であれ首相であれ、これらの事実を「慰霊」などという宗教行為や金で覆い隠すことなどできないことを、この上なくはっきり示している。

これまで書いてきた内容は、しかし、なんと、このAlertの前号からわずかひと月の間に起きたことを、ほんの少しつまんだだけのものなのだ。私たちの前にある課題は、あまりにも大きすぎると、ため息をつかずにいられない。だが、すでに私たちは新たな行動を起こしている。二月一日の反「紀元節」の行動は、天皇の代替わりに向かう状況の中で、この日本国家が、どれほど虚構に満ち溢れたものであるかを明らかにし、これを撃つていくものだ。「戦後」の日本、「戦後」の天皇制国家が、歴史事実から逃避して神話に逃げ込む、まさに象徴天皇が捏造としてあるゆえんの、汚濁した国家の祝日として捏造されたのが、この「紀元節」である。多くの人々が、この日のデモと集会に参加されることを強く呼びかけた。

(編輯)

## やまゆり園襲撃事件を思う

昨年、最も衝撃を受けたのは津久井やまゆり園襲撃事件だった。職員だった人が命を奪いに来る。殺された人はどんな思いでいたろう。生存者、遺族はどんな思いでいたろう。心のケアをとほ言うが、先日まで自分を支えてくれた人が殺しに来る恐怖、どうケアできようか？

事件を眺める匿名のまなざし、ざわめきにも脅威を感じた。加害者に同調し障害者を「無駄」と言い「節税になった」というコメントも見た。現政権も福祉切り捨てに余念がない。加害者の背中を押すもの、そこら中にある。

これに加え「精神病者の保安処分」を訴える意見が出てきたことにも打ちのめされた。精神病患者を治安政策の対象としてきた歴史への逆戻りだ。2013年、国連拷問禁止委員会が政府に患者の非自発的長期入院の改善を勧告したばかりだ。

知的障害にせよ、精神障害にせよ、決定的に共通するのは健常者からの差別だ。運動・言論の中にも刷新が要る。作家・精神科医の野田正彰が5年前、『新潮45』で橋下徹を精神病患者と断定した。健常者の権力性を発揮して差別構造を強化してしまふ言動は誰もが加担する可能性がある。「共に生きよう」という思想は「差別をやめよう」という思想によって可能になる。

(まおう鳥)

## オリンピック災害おこわり

『2020オリンピック災害』おこわり連絡会」が立ち上がる。準備会として、リオ五輪反対運動に参加したいちむらみささんの話を聞いた。『災害』と言う言葉もリオの仲間たちのバナーから「地獄へようこそ」——開催1か月前に給与の不支給に抗議し警官たちが空港で掲げたバナーは大きく報道されたが、ストライキは地下鉄や税関の職員、教員等に広がり、学校では学生たちが連帯の占拠。いちむらさんは「排除のゲーム」と名付けられた一連の対抗運動に参加、人口の23%もの人々が暮らすファベラといわれるスラムの中で、人身売買や住居からの追い出しに反対する人々、フェミニスト……等がオリンピックにより徹底的に破壊されるコミュニティを守り、排除と闘う豊かな運動を紹介してくれた。さて、TOKYOを巡る「オリンピック災害」は？

結成集会は22日、多彩な「Read in Speech」が私たちの対抗運動のスタートだ。一九四〇年幻の東京五輪から戦後「復興」の象徴としての一九六四年、そして福島原発事故に対して安倍が「アンダーコントロール」と語った二〇二〇年。ナオミ・クラインの「ショック・ドクトリン」そのままの惨事便乗型資本主義の正体を私たちは一つ一つ明らかにしていこう。五輪返上！

(きまぐいん のこい)

## 物損カンパ大・大・大感謝

「11・20天皇制いらないデモ」で破壊された物品の損害カンパは、目標額の25万円を大きく超え、一〇〇万円に迫る勢いで集まっています。カンパして頂いたみなさん、本当にありがとう！詳細な報告は近々いたしますが、実行委としては、天皇代替りに向けて激しくなる右翼・警察の攻撃を補填し、反天皇制運動を前に進めていくために大切にに使わせていただきます。

このところテント村の事務所には二度ほど武蔵野署から留守電が入っています。大方「11・20の被害届を出さないのか」という趣旨の連絡だと思えます。何百人も機動隊を出しておきながら右翼の襲撃を放置し続け、自分らもデモ参加者を小突き回した警察。「盗人猛々しい」とはこのことです。

こんなミエミエのマッチポンプを仕掛けてくるなんて、やはり「代替り」というのは彼らにとってもつくづく動揺期なんだな。と。右翼「有識者」の「退位反対」、少しずつ出始めた「憲法違反」の疑義、適応障害の「新皇后」……。『11・20』であからさまになった表現の自由の臨界点。あちらの矛盾は、しかし私達民衆自身の問題でもある。二〇一七年は間違いなく、「そういう年」になるでしょう。でも、楽しくやろうね！

(井上森／立川自衛隊監視テント村)

# 状況批評

思想・状況・批評

## 立憲主義と象徴天皇制——生前退位問題を契機として

中北龍太郎（弁護士、関西共同行動共同代表）

畏友天野恵一さんから新年早々発刊の機関紙の原稿依頼を受けた。これまでも三〇年近くにわたって折々に頼まれてきたが、「憲法の中の天皇制」「立憲主義と改憲」などどれも難しいテーマばかりだった。今回は、生前退位問題を契機として立ち上がってきた「立憲主義と天皇制」というこれまでの難題を包括するテーマで、難度はさらに高い。期待にそえるか自信はないが、与えられた紙面の中で現在考えているところを率直に述べることにする。

生前退位問題を政治過程に一気に浮上させた八・八メッセージは、天皇自ら、「天皇が国民統合の象徴としての役割を果たす」ために生前退位ができるよう求めたものである。その理由として、国民統合の象徴としての役割を果たすためには、「象徴天皇の務め」である「象徴としての行為」が、「常に途切れることなく、安定的に続いていく」ことが重要だと訴えている。そして、高齢のため象徴としての行為が困難な天皇が天皇であり続けると、象徴天皇制が不安定になるというのである。だがしかし、このメッセージには憲法上重大な問題がある。憲法は天皇の権能を「この憲法の定める国事に関する行為のみ」に限定し、「国政に関する権能」を認めていない。憲法で認められている国事行為は一二の行為に限定されており、これらはいずれも形式的・儀礼的行為であり、しかもすべて内閣の助言と承認が必要である。ところが、国事行為や私的行為以外に、象徴としての地位にあることを

理由として、公的行為（象徴としての行為）を大量に行っている。公的行為は年々増加しており、昨年は五二九件に上っている。例えば、外国元首との親書の交換、外国公式訪問、国会開会式での「おことば」、各種大会への出席、園遊会の開催、正月の一般参賀、地方巡幸、拝謁、内奏などである。憲法に定めのないこれら公的行為について、政府は合憲だと言い続けている。しかし果たしてそうなのか。

憲法四条一項は「この憲法の定める国事に関する行為『のみ』」が公的に認められる行為だと定めている。憲法は、「のみ」というはっきりした表現で、天皇の公的に認められる行為を国事行為に限定しているのである。この規定は、天皇の地位に関する憲法一条に対応している。一条の「日本国民統合の象徴」とは、「国民が統合している」ことを象徴しているという意味で、天皇の象徴としての地位はあるが、ままの姿を映す鏡のようなもので、あくまで受動的な象徴に過ぎない。それ以上に、天皇が能動的に国民を「統合していく」象徴だと定めたものではない。憲法四条一項の明確な限定は、憲法一条の象徴の地位の受動的な性格の表れだといえる。

憲法で明記された公的行為禁止原則は、立憲主義の原理から、厳格に順守されなければならない。憲法は主権者である市民が市民の自由と人権を守るためにつくった国家に対するしほりである。この立憲主義は、いうまでもなく憲法九条だけに適用されるというものではない。

近代市民憲法は、世界史をつくり変えたフランス革命を典型とするように、王権との闘いから誕生した。このルーツからしても、立憲主義は、王権の一つの型である象徴天皇制にもきっちり貫徹されなければならない。これが日本国憲法の原点解釈である。

大日本帝国憲法は、矛盾もはなはだしい神権的天皇制と立憲主義との複合的性格の強い憲法であった。立憲主義は大正デモクラシーとして開花したが、昭和に入るとまたたく間に崩壊し、敗戦まで神権的国体観念が日本中を覆い尽くした。立憲主義崩壊の行きついた先が、大量殺戮であり戦争の惨禍であった。敗戦後何よりも求められたのは、立憲主義の復活強化であった。憲法制定権力である国民が、権力の濫用を防止して人権を保障し、政府による戦争を禁じて平和的生存権を守るために新憲法を制定し、違憲立法審査権など憲法を厳守させるための制度的保障により民主・人権・平和の実現を図った。新憲法の制定は、立憲主義の飛躍的發展の画期となった。

新憲法によって、天皇は主権者にして、統治権の総攬者兼統帥権者と定めた大日本帝国憲法下の天皇制ではなくなった。しかし、敗戦に至るまで国民統合の精神的装置として日本人の心を支配し、臣民を戦場に駆り立ててきた天皇制の負の遺産は克服されず、天皇制は象徴として延命した。天皇制と立憲主義とは併存し、憲法の複合的性格、矛盾の構造は残存した。こうして、国民を忠君愛国思想に染め上げ、戦争に動員する精神的装置としての天皇制は護持されたのである。象徴天皇制が能動的に国民統合機能を発揮するならば、それは戦死のススメに行きつくだろう。

天皇制は、民主・人権・平和の憲法三原理と本質的に矛盾関係にある。いかなる国家機関も国家権力の直接の現実的担い手である市民の

意思によって決定できるというのが国民主権原理であり、世襲にもとづく天皇制は原理的に国民主権原理と相容れない。また、天皇に血統による特別の地位と権限を与える制度は、人はすべて平等であるという根本観念にもとづく制度である民主主義と矛盾している。そればかりでない、現人神であるという宗教的権威がその存在根拠である天皇制は、政教分離原則を侵食する危険を本質的に持っている。天皇制が国民を戦争に動員する精神的装置となれば、九条はますます脅威にさらされることになる。こうした憲法原理と矛盾だらけの天皇制が、国民統合機能を通じて強化されると、憲法三原理の破壊が進むことは必然的である。公的行為は憲法を壊す危険性ははらんでいるのだ。

ところが、戦後間もなくから解釈改憲によって様々な公的行為が公然と行われてきた。例えば、毎年異なる地方で開催される国民体育大会や植樹祭で天皇が「おことば」の朗読や「お手植え」を行う行事は、国民意識を統合する重要な場になってきた。国会開会式で正面中央の一番高いところに設けられた天皇の座で「おことば」を述べる旧憲法時代からの慣例は、天皇の権威を強化してきた。しかしながら、憲法九十九条は真つ先に天皇をあげて憲法尊重擁護義務を課している。この規定は立憲主義の端的な表れである。真つ先に憲法を守らなければならない天皇による憲法違反の公的行為は、立憲主義の破壊以外の何物でもない。

こうした解釈改憲とともに、天皇制のさらなる強化を含む明文改憲が企てられている。二〇一二年に自民党が発表した憲法改正草案では、前文冒頭で、「日本国は、日本国民統合の象徴である天皇を戴く国家である」と謳い、第一章で、「天皇は日本国の元首」、「国旗は日章旗とし、国歌は君が代とする。日本国民は、国旗及び国歌を尊重しなけ

ればならない。」「元号は、法律の定めるところにより、皇位の継承があつたときに制定する」、「天皇は公的な行為を行う」などを盛り込んでいる。自民草案は、天皇の権威や国民統合機能を強化して、天皇制国家体制を確立しようとしているのである。

自民草案は、戦争する国づくりとともに、天皇制国家体制をはじめ国家主義・国粋主義の復活強化を狙っている。天賦人權説の否定をもとにした人權全般に対する公益・公の秩序の名による大幅な制約、国民に国防義務、領土保全義務、公益・公序服従義務、緊急事態指示服従義務、戦前の家族国家観につながる家族扶助義務条項を課し、靖国神社の公的復権に道を開く政教分離原則の大幅な緩和条項などは、天皇制国家体制とセットで国家主義・国粋主義を復活強化することになる。そうなれば、憲法は、市民による人權と平和のための政府に対するしほりから、国家が市民をしほりつけ、戦争するための道具へと大きく変質することになる。

安倍首相が共に改憲を進めようと熱いエールを送っている極右団体の日本会議は、自民草案と同じ基調の改憲案を発表している。その前文は「我々日本人は古来……天皇と国民が一体となって国家を発展させてきた。我々は、このような我が国固有の国体に基づき……この憲法を制定する。」とある。この前文に対応して、本文の「天皇」の項では、「天皇は日本国の元首であり、日本国の永続性及び日本国民統合の象徴である。」として天皇の地位を強化し、また、「天皇は伝統に基く祭祀、儀礼その他象徴にふさわしい行為を行う。」として、現憲法で私的行為とされる天皇制の核心にある皇室祭祀が憲法上公然化され、天皇の宗教的権威の復活がもくろまれている。また公的行為も合憲化され、さらに「天皇及び象徴の尊厳は守られるべきことを明記

する。」とあり、不敬罪の復活の意図が露骨に表れている。公的行為による国民統合を通じた象徴天皇制の強化は、こうした恐るべき憲法改悪の先取りにほかならない。

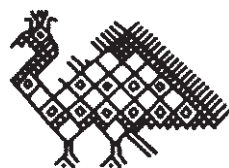
戦争法制定を突破口とする戦争する国づくりが進み、日本が殺し殺される国になろうとしている現在、戦後初めての戦死者が出る可能性が強まっている。そうなれば、権力者たちは、戦死を戦争国家体制強化の宣伝に最大利用し、靖国神社の公的復権、国家への忠誠義務を押し付けようとするだろう。そうした中で、憲法改悪の動きが一気に推し進められかねない。早ければ今年はそんな危険な時代の始まりになるかもしれない。

私たちは、天皇制国家体制の強化、戦争への道をとめるためにも、立憲主義の立場から、憲法違反の公的行為をやめさせなければならぬ。公的行為の中止は、憲法を逸脱する象徴天皇制の強化にストップをかけることであり、天皇制を無化し、廃絶への最初の一步となる。公的行為中止の公論を巻き起こそう。

みたび

# 太田昌国の夢は夜ひらく80

## 何よりも肝要なことは「アジアとの和解」だ



二〇一二年に再登場して以降の安倍政権の官邸周辺には、よほどの知恵者がブレインとされているように思える。世論なるものの気まぐれな動きを、蓄積された経験智に基づいて的確に察知でき、これに対処する方法に長け、同時にマスメディア対策もゆめゆめ怠ることなく、効果的に行ない得る複数の人物が……。このように言う場合、もちろん、働きかけられる「世論」と「メディア」の側にも、「自発的に隷従して」（エティエンヌ・ド・ラ・ボエシ）それを受け入れるという意味での、哀しい（相互作用）が生まれているのだという事実を大急ぎで付け加えておかねばならない。

二〇一六年一月二月、ロシア大統領をわざわざ首相の地元の温泉に招いて会談するという宣伝がなされていた時期には、「北方諸島」の帰属問題で日本に有利な結果が生まれそうだと観測がしきりになされた。例えば「二島返還」という具体的な形で。その「成果」の余勢を駆って、首相は年末あるいは年始の衆議院解散に踏み切るのでは、との予測すらなされていた。その前段において、この展望は甘かったという感触が得られてすぐ、日露首脳会談の展望をめぐる首相の口は、重くかつ慎重になった。間もなく、首相はロシア大統領との会談を終えた半月後の年末ギリギリにハワイの真珠湾を米国大統領ともども訪れるというニュースが大々的に報道された。官邸

ブレインは、「見事な」までの、首相スケジュール調整機能を発揮した。

世論とメディアは、首脳会談なるものにも弱い、あるいは、甘い。会談の無内容さは、世界の二大超大国、ロシアと米国の大統領と次々と渉り合っている「われらが宰相」——というパフォーマンス効果によって打ち消される。一六年五月の米国大統領の広島訪問を思い起せばよい。主眼は、大統領が広島訪問の直前に行なった岩国の米軍海兵隊基地での兵士激励であり、その付け足しのように行なわれた、一時間にも満たない広島行きではなかった。せめても、岩国米軍基地と広島への訪問が「セット」で行なわれた事実の意味を問う報道や発言がもっと多くなされるべきだったが、それは極端に少なかった。にもかかわらず、大統領の広島訪問とあの空疎なメッセージは、大きな効果を発揮した。日本国首相にとっても。大統領が苦心して折った折り鶴を持参して原爆資料館に贈呈したなどという無意味な行為が、感傷的に報道されたりもした。八年間の任期中にこの大統領が、核廃絶のために行なった具体的な政策の質と総量が同時に検証報道されたなら、広島行きのパフォーマンスの偽善性が明らかになっただろう。この点に関しては、在日の米国詩人アーサー・ピナードも、峠三吉『原爆詩集』（岩波文庫、二〇一六年）に付された解説で的確に論じてい

る。

一六年末、真珠湾を訪れた日本の首相も、「不戦の誓い」と「日米の和解の力」を強調する演説を行なった。これを大々的に報道した主要メディアの中には、訪問を一定評価しつつも、「アジアへの視点」の欠如を指摘するものもあった。だが、「不戦の誓い」は、この政権が続いている諸政策と沖縄への態度に照らせば、化けの皮がすぐに剥ける性質のものであり、「日米和解」に至っては、戦後日本の米国への「自発的隷従」が続けられたことで夙に実現しているというのが、冷めた一般的な見方であろう。したがって、後者の「アジアへの視点」の欠如こそが強調されなければならない。例えば、一月八日（日本時間）真珠湾攻撃の一時間前には、日本陸軍がマレー半島への上陸作戦を開始していた、という史実への言及がなされるだけで、「日米戦争」という狭い枠組みは崩れ、短く見ても一九三一年の日本軍の中国侵略に始まるアジア・太平洋戦争の全体像に迫る視点が生まれるだろう。中国侵略戦争が行き詰まることで、日本はフランス、英国、オランダなどの植民地が居並ぶ東南アジアへの侵攻を国策の中心に据えていたのだから、真珠湾攻撃に先立って行なわれたマレー侵攻の意図は、明らかなのだ。アジアと向き合うことを、歴史的にも現在のにも無視する常習犯。現日本国首相は、にもかかわらず「地球儀を俯瞰する外交」などとしたり顔で語っている。首相の真珠湾訪問と同じ日、韓国は釜山の日本総領事館前に「慰安婦」を象徴する少女像が設置されたことは（これには論ずべき多様な問題が孕まれているとはいえ）、日本がもつとも肝要な「アジアとの和解」を実現できていないことを示している。この事実を改めて心に刻んで、一年を送りたい。（一月七日記）

マスコミの制  
天 皇  
07「内閣と相談しながら」というコトバの政治的意味  
——〈壊憲天皇明仁〉その5

天 野 恵 一

二月三日の「反天連」の定例会を今年のゴールとして、この間、天皇の「生前退位」メッセージでスタートした「平成代替り」の政治をめぐる集会での発言が続いた。皇室情報は洪水のごとくたれ流され、アップアップしながら、それらを読み、整理しながら、私は発言し続けた。しかし、そのマスコミの「洪水」の中には、本当にマトモな情報も、正面からの天皇（制）批判の声も、まったく少なかった。菊タブーが強力に支配するマスコミ空間。

八三歳の誕生日の記者会見（実際は二〇日にやっただりである）の言葉で、私が注目したのは、以下のくだりである。

「八月には、天皇としての自らの歩みを振り返り、この先の在り方、務めについて、ここ数年考えてきたことを内閣とも相談しながら表明しました」（傍線引用者）。

この発言は、一月三〇日にオープンにされた、一月二二日の秋篠宮の以下のような発言と、対応している。

「その一方ではやはりこれは憲法にも関係することですし、非常に慎重な対応をしないといけないわけです。そういうことからお立場の責任もありますので、宮内庁長官をはじめごく限られた人たちで、随分そのことについて相談をされ、そして内閣の了解をも得てお気持ちを表されるということに至ったと私は理解しております」（傍線引用者）。

天皇（夫婦）を中心とする皇族はどうやら、「メッセージ」が憲法を破壊する暴走（その内容も発表の

方法も）であることに、かなり自覚的であったようだ。マスコミのタブーとしたのは、この違憲暴走の事実である。それを「合憲」のイメージでぬりたくる作業が精力的に続いているのである。

私たち反天皇制運動は、「護憲天皇アキヒト」というマスコミじかけのイメージの自己破壊した「壊憲・違憲天皇」への批判（問題は「生前退位」の可否などではない）へと集中した。

天皇や秋篠宮の発言は、残念ながらそうした私たちの声におびえただけなされたとはいえない（私たちの運動の声はまだ小さい）。

まちがいでなく、「内閣」の助言と承認なきでは、なにもしてませんよという、「合憲」の政治的ポーズづくりのこの発言は、主に右派メディアを中心とした「違憲天皇」批判に対応したものと考えべきだろう。一つ二つ例を引く。『週刊新潮』（二〇一六年九月

一五日）の「若は賞賛一色でも専門家たちは違和感天皇陛下『お言葉』そこには「違憲が暴走」と断じる皇室記者の失望」には、今回スクープは天皇自身の

のしかけで、「宮内庁と公共放送とタッグを組み」、事前にメディアにリークして世論の反応を探った上での違憲の政治的な操作であったというベテラン記者の声や、「日本中が思考停止に陥り、憲法との兼ね合いから目を逸らされてしまった」という声を紹介している。その結びは、皇室記者たちの「落胆は、依然広がったままだというのだ」である。こういう

皇室記者たちの動揺を、キチンと記事にできるマスメディアは、「天皇主義メディア」だけのようだ。

もう一つ、マスコミが大々的に報じ続けている「天皇の公務の負担軽減等に関する有識者会議」の第一回ヒアリングでの比較文化史・研究者平川祐弘の発言。

「天皇の大御心として特例法で対応するならば、憲法違反に近い。スピード感をもって超法規的に近い措置をすれば世間には受けるかもしれないが皇室の将来のためにはいかがかと思う」（傍線引用者）。

この人物も「天皇は民族の永世象徴」ただ「祈れ」という神権天皇主義者である。

もちろんマスコミでの批判が許されている神権天皇主義者の「天皇違憲論」は戦術的論理であるにすぎない（自分たちに都合のいい、天皇のさまざまな違憲行為への〈違憲〉という批判は、決してしないのだから）。

安倍政権のコントロール下の「有識者会議」は、あらかじめ準備された、とりあえず一代かぎりの「特例法」で対応するという結論に向かって進んでいる。それを拒否するという天皇政治は、「右翼の違憲非難」のマスコミへの突出によって、押えこむ。こういった安倍政治の効果が、天皇らの「内閣とも相談しながら」という発言（合憲手続きを踏んできたというポーズ）に、にじんでいる。

ここでも、私たちが注目しておくべきなのは神権天皇主義者や安倍政権と天皇（ら）の対立一般ではなく、その対立（相互反撥）によってつくりだされる〈国家（象徴）天皇主義ナショナリズム〉の強化という現実である。

私たちの〈違憲論〉は、象徴天皇制それ自体が人民主権憲法では、結局、原理的には違憲の存在ではないという立場の産物である。戦後（民主・人権・平和）憲法自身の自己矛盾への思想的・運動的執着こそが、私たちの運動の〈原則〉であるはずだ。



齊藤利彦『明仁天皇と平和主義』（朝日新書）、河西秀哉『明仁天皇と戦後日本』（朝日新書）  
**「リベラル」派のアキヒト天皇論**  
 千本秀樹（現代史研究）

編集部から、次の三冊、最近の「リベラル」系の明仁天皇論について論じてほしいという依頼を受けた。「リベラル」に括弧をつけたのは、編集部からもこの三人をリベラルで括っていいのだからかという迷いのようなものを感じたからである。それはまた、リベラルとは何かという問題提起ともなっている。

齊藤利彦『明仁天皇と平和主義』（朝日新書、二〇一五年七月）／河西秀哉『明仁天皇と戦後日本』（洋泉社 歴史新書、二〇一六年六月）／島田裕巳『天皇と憲法』（朝日新書、二〇一六年一〇月）

齊藤利彦は一九五三年生まれ、大学は法学部、大学院は教育学で、現在学習院大学教育学科教授、河西秀哉は一九七七年生まれの歴史学、島田裕巳は一九五三年生まれ、オウム事件でも有名になった宗教学者である。経歴を紹介したのは、世代によって天皇制体験が異なるのと、研究分野によって手法が異なるからである。

齊藤本は一九四五年を境に二部構成、各二章と終章。序章は、明仁天皇の学習院初等科時代の教員が残した、まとまった資料が神田の古書店で見つかったと新聞社から知らされて、明仁少年の作文などを閲覧したというエピソードから始まる。閲覧できたのは現職に関係する役得かとも憶測するが、まだ公開が認められていないようで？ 読者にとっても不幸である。

帯の宣伝文句は「天皇陛下の平和への希求 その原点にあるもの——。幼少からの歴史的事跡を改めてひもとくとき、天皇であると同時に一人の生身

の人間としてどんな模索と葛藤があったか自己形成の道のりをたどる」。このコピーは出版社がつけたものだろうが、著者の意図を正確に表現していると思われる。

しかし本書本文で、その意図が成功しているとはいえない。一九四五年以前の第一部で、本書の半分近い紙幅をさいて、一少年明仁と、帝王学教育を受ける次期天皇の相克を描こうとしながら、その相克が戦後の明仁親王・皇太子・明仁天皇の思想にどうつながったのかがほとんど述べられていない。これでは、ヴァイニング夫人に洗脳されたと読者は読んでしまう。

帝王学教育の「象徴的暴力」と、傳育官（ふいくかん）による物理的暴力という複合的暴力を受けることによって、明仁天皇は「非権力性」への志向」という強い意志を持ったと書いているのは興味深いが、歴史屋から見ると、あまりにも実証が弱すぎる。

齊藤本がタイトルに反して、近年の「平和主義」的発言についての叙述が少ないうちにくらべて、河西本は、それぞれの戦地訪問における明仁発言を網羅しており、明仁年表としては便利である。特に、マスコミと世論の明仁天皇へのまなざしがどう変化したのかを追っているのは参考になる。ミツチーブーム以降、「開かれた皇室」路線で邁進し、その後「平和」を加えて二課題となったというのは、それはそうだろうと思うのだが、わたしたちにとって問題は、「象徴の公務」である。齊藤と河西は、共通して園部逸夫（元最高裁判事、元皇室会議議員）

の主張を引用する。

園部は象徴の法的解釈として、「普遍的な価値（平和・環境）に関するものであって、かつ、非政治的な活動や、国民が共有する価値（福祉・文化・健康）に関する活動などへ積極的に関心を寄せることや支援を行うこと」とする。しかしいまや、平和、環境、福祉、文化、健康こそが政治的焦点である。それを「非政治的」とすることこそが、政治的なのである。

齊藤は序章で、「本書の基調は、天皇制を自己の政治的主張からのみ論じることとはあつてはならないとする立場である」として日本国憲法第一条を引用し、「したがって天皇制に関する議論は国民的な（総意）の創出を出発点とすべきことを認識するからにはかならない」と書く。「国民的な（総意）の創出」を必要とすることこそが自己の政治的主張であることに気がついていないことが、「リベラル」の滑稽さである。象徴が人間であることも滑稽であるが、仮に富士山を国家の象徴としても、それは精神的暴力性を持つ。

島田本について書く紙幅がない。島田は、一七条憲法の制定も、大日本帝国憲法の制定も、その日本国憲法への改正も、国際的要因で行なわれたのだから、その意味では憲法改正は必要はないと論じ続け、最後に、皇位継承権者がいなくなると、大相撲に内閣総理大臣杯より価値の高い天皇杯を授ける存在がなくなつて大変だから、大統領制にしようというドンデン返し。ネタをばらしてごめんなさい。

# ゆんたくネットワーク

## ゆんたく高江について紹介します。

### ほしのめぐみ（ゆんたく高江）

二〇〇七年、沖縄県東村高江（たかえ）のオスブレイパッド工事が住民に説明なくはじまり、それを受けてテントを立てての座り込みが現地で始まりました。そのことを契機に、高江に友達がいる人や、高江の座り込みに共鳴した人たちが、東京でこのことを知ってもらおうと二〇〇八年に始めたのが「ゆんたく高江」です。年に一度、六月ごろに行うゆんたく高江は、五感を使って高江のことを感じてもらうと、高江の野菜販売、高江産パイン酒、住民の会トーク、音楽演奏や人形劇など、毎年趣向を凝らして、楽しみながら準備しています。今はなき中野の駅前広場、上野水上音楽堂、新宿の廃校になった学校、ライブハウス、大学の教室など、場所ややり方を毎年変えて、たくさんの人たちの協力のもとに、行われてきました。

年に一度のイベント以外にも、ゆんたく高江に関わる個々人が企画するカフェイベントや、高江現地に行った人の報告会、高江関係の映像を上映する会、抗議への参加など、情報を共有し、一人でも多く高江のことを知ってもらおうと活動をしてきました。ゆんたく高江は団体ではなく、高江のことを思う個々人の連合といった感じです。

ゆんたく高江の面白いところは、本当にいろんな人たちが関わっていることで、年齢も職業も趣味もばらばらだけど、高江のことを広めたい・関わりたいという一心で集まっていること。だから、出てくるアイデアに多様性があって、いろんな角度から

活動できること。防衛省にはがきを送ろう！キャンペーンの時は、みなで集まって高江に行ったことがない人も高江の絵やメッセージをはがきやパイン型に切り取った段ボールに書いて送ったり、官邸前でちゃぶ台抗議というのもやって、手作りのちゃぶ台前で楽器片手に歌をうたったり、茶を飲んだりブラカードを並べて高江の工事強行に抗議。へなちょこだつていいじゃないか。なんかやろう。そんな意気込みを持ちながら、新年には高江カルタ＆書初め大会を代々木公園近くでやった時もありました。通りすがりの人も「なんかおもしろいことやってる」と加わって、楽しく高江のことを知ることができる！「イボイモリ つぶらな瞳に ラブ注入」ZINE化される前の宮下公園で高江上映会とトークをやったこともありました。各地のお祭りに出店して住民の会グッズ（Tシャツ・てぬぐい・ステッカーなど）を販売したり、パイン酒を売って一緒に語ったりしながら、沖縄の基地問題を共有する。ポインントは、自分たちが続けていて苦しくないやり方です。やってきたということだと思えます。怒りのこぶしを突き上げる、デモに参加する、これも一つのやり方だけど、そこに参加するのにはちよつとハードルが……という人たちが巻き込んで、なにか行動する第一歩にする。楽しみながらできるやり方を模索する。それを心掛けてきたような気がします。もちろん大事な時にはデモや抗議行動も参加しつつ。しかしながら、二〇一六年の夏以降の高江の状

況はあまりにもさまざまいいもので、毎年七月から工事が本格化するので警戒はしていたものの（わたしも事前に七月の沖縄行チケットは取っていたのですが……）、ここまであからさまな機動隊を大量動員しての弾圧があるとは思っていませんでした。四月にあつたうるま市での女性遺棄・殺害事件の悲しみも追悼も抗議もちゃんとできないままの気持ちで、また胸がかきむしられたという感じでした。ゆんたく高江に関わってきた人たちも、ひとりまたひとりと高江に向かい、現地での抗議活動に参加し、帰ってから報告会や映画上映をやったりと、気持ちの休まらない年だつたと思います。ゆつくり立ち止まって考える隙も与えない弾圧の激しさだったので（今も続いています）、ゆんたく高江も集まって何か企画する……というよりは個々人が動いて、それぞれできることをやるという感じでした。予定していた、高江の集落を囲む六カ所のオスブレイパッドは完成に近づき、ずつと説明を求めてきても「来ない」または「お答えできない」と言っていたオスブレイは飛来し、高江の空を縦横無尽に飛び回っています。厳しい状況だけれど、高江の住民の生活は終わらないし、本当の意味での返還の日まで、高江に静かな日が訪れるまで、現地とつながり続けていきたい。今後何かと斬新なアイデアを出し合っていて、思いを手渡し、つなぐための活動をしていければいいな、と思います。

ゆんたく高江HP: <http://helpad-verybad.org/>  
 ツイッター: @yuntakutakae  
 Facebook: ゆんたく高江

# 12月1日〜12月30日

12月1日〜12月30日

【12月1日】

明仁、美智子、愛子◆愛子が皇居・御所を訪れ、明仁、美智子に15歳の誕生日を迎えたことを報告。皇居・半蔵門から車で入る。

【生前退位】◆明仁が8月にビデオメッセージを公表する約20日前の7月、退位について恒久制度を望む思いを、学友の明石元紹に電話で打ち明けていたことが、明石の証言で分かる。明仁は「将来を含めて譲位（退位）が可能な制度にしてほしい」と語り、父である昭和天皇の正統時代の経験が踏まえ、摂政設置によって混乱が生じることへの懸念を示したというと報道。菅義偉・官房長官が記者会見で「報道は承知しているが、内容一つ一つにコメントすることは控えるべきだ」。退位を巡る政府の有識者会議の議論に与える影響を問われ「その方が、どういう立場で発言されたか分からない。会議では引き続き、予断を持つことなく静かに議論してほしい」。

愛子◆15歳の誕生日を迎える。  
天皇誕生日一般参賀◆宮内庁が、23日の天皇誕生日に皇居・宮殿の東庭で実施する一般参賀の要領を発表。明仁と美智子ら皇族が午前10時20分ごろ、11時ごろ、11時40分ごろの3回、長和殿のペランダに出ると報道。

新国立競技場◆2020年東京五輪・パラリンピックのメインスタジアムとなる新国立競技場の本体工事が始まる。

新国立競技場のメインスタジアムとなる

韓国入学校◆東京都議会定例会の本会議が開かれ、小池百合子知事が所信表明で、知事就任100日を超えたことを振り返り、外添要一前知事が提案した韓国入学校への旧都立高校（新宿区）の有償貸与をやめたことなどの「成果」を強調したと報道。

防衛費◆政府が2017年度予算案の防衛費（米軍再編関連経費を含む）を過去最大の5兆1千億円程度に増やす方向で調整していることが分かる。

【12月2日】

明仁、美智子◆東京・元赤坂の迎賓館を訪れ、「国賓」として訪日中のシンガポールのトニー・タン大統領夫妻が東京での日程を終え、京都を訪問するのを前に、別れのあいさつをする。「朝日の間」で約20分間懇談し、宮内庁によると、大統領が「今日のシンガポールの基盤は日本の支援によるものです」と述べ、明仁が「シンガポールが国民の努力により、1人当たりの所得が日本を超えるまでに発展したことに深い敬意を表します」と応じたと報道。

【生前退位】◆二階俊博・自民党幹事長が、明仁の退位について記者会見で「政治問題化して、党内外の意見が割れるようなことにならない方がいい。私は発言を消

極的にし、できるだけ口を開かないようにしている」。

対北朝鮮制裁◆政府が、5回目の核実験を強行した北朝鮮への独自制裁強化を決定。

【12月3日】

徳仁◆東京都新宿区にあるホテルで開かれた日本山岳会の夕食会に出席。

【12月5日】

明仁◆タイのワチラロンコン新国王の即位に際し、祝電を送る。

真珠湾訪問◆安倍晋三首相が、26、27日に米ハワイを訪問し、オバマ大統領と日米開戦の発端となった地である真珠湾で戦争犠牲者を慰霊する意向を明らかに。

【12月6日】

明仁、美智子◆障害者の社会的、経済的自立を目指し、就労を支援する東京都葛飾福祉工場（葛飾区）を視察。

秋篠宮、紀子、悠仁◆長崎市の爆心地公園を訪れ、原爆落下中心地碑に供花。小学校が入試のため休日を利用した「私的な旅行と報道。近くの長崎原爆資料館や長崎歴史文化博物館を見学。

真珠湾訪問◆菅義偉・官房長官が記者会見で、安倍晋三首相による米ハワイの真珠湾訪問は犠牲者への慰霊が目的であり、謝罪は行わないと表明。

会食◆安倍晋三首相が、東京・元麻布の元麻布ヒルズの日本料理店「東郷」で毎日新聞社の朝比奈豊会長、丸山昌宏社長らと会食。

【12月7日】

【生前退位】◆政府が、明仁の退位を巡る

有識者会議（座長・今井敬・経団連名誉会長）の第6回会合を首相官邸で開く。退位のは非や、「公務負担軽減策」について聴取した専門家16人の見解を基に討議して項目別に整理し、退位の賛否が分かれた専門家の意見を踏まえ、メンバー6人のうちの1人が退位容認の意見を述べたと報道。座長代理の御厨貴・東大名誉教授が論点公表の時期について記者団に「来年1月」という期待はあるが、拙速になってもいけない」。

歴史認識◆中国外務省の陸慷・報道局長が定例記者会見で、安倍晋三首相の真珠湾訪問に関連し「米国の人々が真珠湾攻撃を忘れていないように、中国の人々も南京大虐殺で亡くなった同胞を永遠に忘れない」。英字紙チャイナ・デーリーが、真珠湾訪問は歴史への反省ではなく、日米同盟強化が狙いとして「偽善行為だ」と非難する専門家の見方を伝える。

【12月8日】

天皇 皇族◆宮内庁職員組合の文化祭が庁舎内で始まり、明仁、美智子や、皇太子一家、秋篠宮一家ら皇室の作品が例年通り展示される。

【生前退位】◆衆院憲法審査会の幹事懇談会で、民進党が明仁の退位をテーマとするよう要求。自民党が国会での議論の在り方を見極める必要があるとして、折り合えなかったと報道。

新年一般参賀◆宮内庁が、翌年1月2日に皇居で新年一般参賀を実施すると発表。明仁、美智子が午前と午後の計5回、宮殿の長和殿ペランダに出て、集まった人

たちの参賀に応じ、徳仁、雅子や秋篠宮、紀子、眞子、佳子ら成年皇族と一緒に並ぶと報道。

## 【12月9日】

**天皇、皇族**◆雅子が、53歳の誕生日を迎えたとして、明仁、美智子にあいさつをするため、皇居・御所を訪問。これに先立ち、東京・元赤坂の東宮御所で、秋篠宮、紀子ら皇族から「祝い」の言葉を受ける。

**安保法**◆各地の大学教授ら憲法研究者101人が、南スーダン国連PKOに参加する自衛隊に新たに付与された「駆け付け警護」などの任務が「憲法9条で禁止された武力の行使に当たるとして、自衛隊の即刻撤収を政府に求める声明を出す。

**雅子**◆53歳の誕生日を迎えたとして、宮内庁東宮職を通じて文書で感想を発表し、明仁が退位の意向を強くにじませた8月のビデオメッセージについて「テレビ放送を厳粛な思いで拝見し、陛下のお気持ちを重く受け止めた」。適応障害による療養生活が続く自身の活動について「できる限りの務めを果たそうと努力した」。

**「生前退位」**◆政府が、明仁の退位を巡る有識者会議が11月30日に開いた第5回会合の議事録を首相官邸ホームページで公表。憲法学者5人を招いて実施した意見聴取で、園部逸夫・元最高裁判事が、それぞれの天皇が考える多様な「象徴の在り方」に対応するためとして、皇位継承に退位を加える意義を強調したことが明らかにになったと報道。

**部落差別解消推進法**◆部落差別の解消を

目指し国や自治体に相談体制の充実や実態調査を求める「部落差別解消推進法」が、参院本会議で与野党の賛成多数で法案を可決、成立。

## 【12月10日】

**秋篠宮、紀子**◆2020年の東京五輪・パラリンピックを前に、雅楽や武道を通じて日本の「伝統文化」を海外から来た人知ってもらおうと、東京都渋谷区の明治神宮会館で開かれたイベントに出席。

## 【12月11日】

**明仁**◆東京の日本武道館で行われた全日本空手道選手権大会に出席。当大会から組手の男女優勝者にそれぞれ天皇杯と皇后杯が授与されることになったとして初めて出席したと報道。

**美智子**◆宮内庁が、美智子に微熱と急性気管支炎の症状があることから、日本武道館で開催される全日本空手道選手権大会への出席を取りやめると発表。明仁だけが出席すると報道。

**徳仁、雅子**◆徳仁が、東京・目黒の学習院創立百周年記念会館で開かれた学習院OB管弦楽団の定期演奏会に出演し、ピアノを演奏。愛子が客席で観賞。

**皇室制度**◆民進党の野田佳彦・幹事長が、明仁の退位を含めた皇室制度の在り方について年内に中間報告を取りまとめる意向を滋賀県草津市で記者団に明らかに。

## 【12月12日】

**美智子**◆宮内庁の西村泰彦次長が定例記者会見で、微熱と急性気管支炎の症状があるととして、11日の「公務」を取りやめた美智子の体調について「症状は改善に

向かっている」。

**天皇会见**◆ロシアのベスコフ大統領報道官が、プーチン大統領が15、16日の訪日時に明仁と会見するかどうかは日本側と一度も協議しておらず、最初から予定になかったと述べる。ロシア通信が伝える。

**米軍北部訓練場**◆沖縄県の翁長雄志知事が、米軍北部訓練場（東村、国頭村）の部分返還に合わせて政府が22日に開く式典に欠席すると表明。

**オスプレイ墜落**◆沖縄県うるま市沖で米軍普天間飛行場（同県宜野湾市）所属の新型輸送機オスプレイ1機が海上に「不時着」したと報道。

## 【12月14日】

**常陸宮、華子**◆常陸宮夫妻が、東京都豊島区の東京芸術劇場を訪れ「第35回肢体不自由児・者の美術展」を鑑賞。

**「生前退位」**◆明仁の退位を巡る有識者会議（座長・今井敬・経団連名誉会長）が、第7回会合を首相官邸で開く。法整備の在り方に関するメンバー間の討議で、退位に要件を設けて恒久制度化するのは困難との認識で一致。座長代理の御厨貴・東大名誉教授が議論の中間まとめとなる論点整理の公表に関し、翌年1月を目指すと記者団に表明。政府が検討する一代限定の特別法を軸とした方向性を示す見通しと報道。会合で海外の王室制度や退位の事例を踏まえた議論を行ったとして、

菅義偉・官房長官が記者会見で、論点整理に関し「こういう問題点や課題がある」ということを国会に示す上で有力なものになる。／民進党の「皇位検討委員会」が国会内で非公開会合を開き、首都大学東京の木村草太教授（憲法学）から明仁の退位を含めた皇室制度の在り方に関して見解を聴く。専門家の意見聴取はこれで終了と報道。

**【12月15日】**  
**皇族**◆三笠宮が10月に死去してから50日目となる「墓所五十日祭の儀」が、東京都文京区の豊島岡墓地で営まれる。

**「生前退位」**◆政府が、明仁の退位を巡る有識者会議が7日に開いた第6回会合の議事概要を首相官邸ホームページで公表。概要では「十分な手続きを踏んだ方がいい」との指摘がある一方で「いきなり公務が不可能になりかねない」との反論が出るなど、実現に向けたプロセスを巡り意見が交わられたと報道。

**原発事故避難者**◆東京電力福島第1原発事故による多くの避難者が暮らす東京都江東区の区議会で、翌年3月末で住宅の無償提供が終了する避難区域以外からの自主避難者に対し、政府などに適切な支援策を講じるよう求める意見書を全会一致で可決。

**皇居**◆宮内庁が、天皇誕生日の23日から翌年1月8日までの夜間、皇居の正門石橋や鉄橋（二重橋）、旧江戸城の面影が残る富士見櫓などをライトアップすると報道。

**【12月17日】**  
**東京五輪経費**◆2020年東京五輪・パラリンピック組織委員会が大会総予算について1兆6千億〜1兆8千億円程度になるとの最新の試算をまとめた。

【12月19日】

明仁◆宮内庁が、明仁に発熱に伴う風邪の症状が残っていると、明仁自身が安倍晋三首相や閣僚、副大臣らを皇居・宮殿に招き、開催される予定だった年末恒例の昼食会を取りやめると発表。

徳仁、雅子◆東京都渋谷区の国連大学を訪れ、日本の国連加盟60周年記念行事に出席。徳仁が「国連の役割は、ますます重要になってきている」とあいさつ。

眞子◆翌年、ブータンを「公式訪問」する方向で調整していることが、宮内庁関係者への取材で分かる。

【12月20日】

「生前退位」◆安倍晋三首相が東京都内での講演で、明仁の退位を巡る法整備に関し「国の基本に関わる極めて重たい課題だ。決して政争の具にしてはならない」。

／明仁の退位を含めた皇室制度の在り方を議論する民進党の「皇位検討委員会」がまとめた論点整理案の全容が判明。退位を恒久的な制度とするため皇室典範を「改正」する必要性を主張し、女性皇族が結婚後も皇室にとどまるため「女性宮家」創設の法「改正」を打ち出したと報道。

【12月21日】

「生前退位」◆菅義偉・官房長官が記者会見で、明仁の退位を巡り、政府が検討する一代限定の特別法を「違憲の疑いを生じさせる」と指摘した民進党の論点整理について「憲法に抵触しているかどうかは、内閣法制局などに相談しながら（法整備を）進める」。（政府の）有識者会議の議論が一定の段階に至った時点で、与

野党を交えた議論も考えたい。／民進党が常任幹事会で、明仁の退位を巡り、恒久制度化するために皇室典範を「改正」する必要性を明記した論点整理を了承。政府が検討する明仁一代に限って退位を認める特別法は「違憲の疑いを生じさせる」と疑問を投げ掛け、女性皇族が結婚後も皇室にとどまる「女性宮家」創設のための典範「改正」を提言したと報道。皇室制度の在り方を議論する「皇位検討委員会」（委員長・長浜博行・副代表）が中間報告としてまとめたもので、幹事会后、野田佳彦・幹事長が記者団に「腹案として持っている考え方を整理した。（党単独による）議員立法の提出は考えていない。みんなで折り合い、まとまればいい」。

【12月23日】

天皇、皇族◆明仁の83歳の誕生日に伴う一般参賀が皇居・宮殿で行われ、明仁があいさつで、新潟県糸魚川市の大火に触れ「多くの人が寒さの中、避難を余儀なくされており、健康に障りのないことを願っています」。美智子や徳仁、雅子、秋篠宮、紀子と眞子、佳子と共に宮殿・長和殿のベランダに並んで立つ。皇族や宮内庁幹部が明仁、美智子にそれぞれ「祝い」を述べる。安倍晋三首相ら三権の長による「祝賀」、皇族や首相、国会議員らが出席する祝宴、各国の駐日大使らを招いての茶会などに出席。愛子と悠仁が「祝い」を述べるため御所を訪問。徳仁、雅子や秋篠宮、紀子、黒田清子夫妻が御所に集まり、共に夕食。

明仁◆83歳の誕生日を迎え、これに先立ち皇居・宮殿で記者会見し、退位の実現に思いを示した8月のビデオメッセージの公表やその後の「国民」の受け止めについて「多くの人々が耳を傾け、おのの立場で親身に考えてくれていることに深く感謝しています」と語ったと報道。

「生前退位」◆古賀誠・元自民党幹事長がTBS番組収録で、明仁の退位を巡る法整備について「特別法で、できるだけ早く陛下のご意向をかなえられる結論を出してほしい。政争の具にしてはいけない」。

【12月26日】

天皇誕生日◆安倍晋三首相が、皇居で行われた「天皇誕生日祝賀の儀」、「宴会の儀」に出席。

南スーダン制裁◆国連安全保障理事会で、南スーダンに対する武器禁輸を含む制裁決議案を採決し、日本が棄権に回る。

【12月26日】

明仁◆宮内庁の西村泰彦次長が記者会見で、明仁が新年に当たって毎年、宮内庁を通じて公表している感想を、今後は取りやめると明らかに。

【12月27日】

「生前退位」◆政府が、明仁の退位を巡る有識者会議が14日に開いた第7回会合の議事概要を首相官邸ホームページで公表。メンバー間による討議で、摂政の設置による「公務」負担の軽減は明仁の「公務」への意欲を踏まえると「現実的ではない」と否定的意見が相次ぎ、一代限りの退位を推す声が大勢を占めたと報道。

の名代として徳仁が出席すると発表。眞子◆宮内庁が、眞子が翌年6月にブータンを「公式訪問」する方向で調整していると発表。

【12月28日】

靖国参拝◆今村雅弘・復興相が、靖国神社（東京・九段北）を参拝。

【12月29日】

「生前退位」◆民進党の野田佳彦・幹事長がインターネット番組で、明仁の退位を一代に限って認める特別法は望ましくなく、この認識を重ねて示す。

靖国参拝◆稲田朋美・防衛相が、東京・九段北の靖国神社を参拝。

【12月30日】

「生前退位」◆政府が明仁の退位に関し、明仁一代に限って認める特別法案を4月下旬の大型連休前にも提出する方向で検討に入つたと、複数の政府関係者が明らかに。法案骨子を3月までにまとめるよう作業を進める方針で、当初、法案提出は5月ごろを想定したが、国会での与野党の合意形成が難航する可能性を懸念し、前倒しに向け調整すると報道。

## カンパへのお礼

カンパを送ってくださったみなさま、ありがとうございました。

今年は、これまで以上に踏ん張ることの多い一年になると思われます。頑張るしかありません。どうぞ、ご一緒に！

# 美空ひばり「皇相」

## 「天皇賛歌」にうんざり! 「女性(的) 天皇制」の今とこれから

二月四日、女性と天皇制研究会(女天研) 連続講座が加納実紀代さんを招いて特別講演会を開催した。参加者は五〇人を超えた。

加納さんは、天皇に対する意識調査で、裕仁天皇から明仁天皇に代替わり後、「好感」「尊敬」が上昇し、もともと地を這うような少なさの「反感」がさらに減っていることを指摘するところから話を始めた。そして昨年の「生前退位」メッセージ。有識者会議では「容認」はギリギリ過半数で、一代限りの特別法と恒久制度で意見が割れているが、世論調査では八割以上が「賛成」という、現天皇への支持の高さを紹介する。加納さんの「右翼の反対」「左翼の賛成?」という分析は少々乱暴にも思うが、「リベラル」層の大半が賛成であることには間違いなく、ぞっとする状況だ。

本題はここから。近代以降の天皇が男性権性を確立する一方で、皇后が登場することで女性(母) 性を發揮してきたことを、『国体の本義』「畏くも天皇は、臣民を「おほみたから」とし、赤子と思召されて愛護し給ひ……」や、三島由紀夫『英霊の声』「われらの大元帥にしてわれらの慈母……」等を引きながら指摘。そ

して敗戦後、天皇は女性化し民主天皇をアピールしたとする。「近代天皇制は男性化によって軍事的に拡大し、危機にあたって女性化することで生き延びてきた」と。

そして現在、天皇の「慰撫」路線は安倍軍事化路線の抑止力になるのかと問い、むしろ民衆の怒りを慰撫・沈静化するものでしかなく、「問題はそれを有り難がり癒される国民の側にある」と手厳しい。しかし対案としての公共的な親密圏の構築も提起された。久しぶりの加納さんの天皇課題の話に会場は共感しながら聞き入った。

質疑応答では、天皇制はすぐに廃止などできないし、まずは「女性天皇」の容認という「目の前の差別」の是正が必要では、との意見が出た。若干の議論があったものの、今後の大きな課題が残ったと思う。

(大子)

## 差別・排外主義に反対する連絡会シンポジウム

二月一日、差別・排外主義に反対するシンポジウムが文京区民センターで行われ、八六人が参加した。連絡会では二〇一一年以降、毎年一回、新宿デモ(職安通り中心)と、二回の討論・講演・シンポなどを実施してきたが、二〇一六年はテーマが山積みの年であった。四月の集会テーマ「日本会議」「トランプ現象」はその後、予想外の展開となった。さら

に五月の「ヘイトスピーチ解消法」の成立、六月の川崎におけるヘイトデモ阻止、七月の「山ゆり園事件」で露わになった優生思想・ヘイトクライム、都知事選での在特会・桜井への十二万四千余りの投票、一〇月の沖縄・高江における大阪府警機動隊員による差別暴言、そして欧米の極右台頭・難民排斥の波など、深刻な問題が続出した。

今回のシンポはこうした現状と課題を洞察し、論議するために企画された。提起はまずジャーナリストの安田浩一さんから、この間の沖縄取材をふまえた差別暴言の歴史的背景を掘り下げるこの意味と、あらゆる領域において差別のハードルが低くなり、「在特会を必要としないほど世間が『在特会化』」している風潮を分析、警鐘を鳴らした。弁護士・師岡康子さんは、成立したヘイト解消法の経緯、成果、問題点を整理した上で、法の活用を通して行政の啓発活動を促す課題を提起。「ヘイトスピーチを許さない! かわさき市民ネットワーク」から在日を先頭にオール川崎で闘った意義を、「怒っているぞ! 障害者きりすてー全国ネットワーク」から山ゆり園事件におけるヘイトクライムと措置入院強化を策す行政の姿勢を厳しく批判した。連絡会からは、各提起を受けての個別課題を越える連帯・共闘の必要、権利をめぐる闘い、差別糾弾の共同行動を訴えた。会場からも提起がなされ、終了後の会場での交流会も含め、各々の現場をふまえた中身の濃い意見交換、交流の場となった。二〇一七年、世界的

に激化するだろうレイシズムの嵐に抗し、ともに反撃を!

(差別・排外主義に反対する連絡会)

藤田五郎)

## 天皇の「生前退位」を議論しよう! 神戸で集会開催

二月一日神戸学生青年センターにおいて、兵庫反天皇制連続講座(はんてんの会)の主催で「生前退位」論争を批判する集会が開催され約四〇名が参加した。

最初に「はんてんの会」から問題提起をした。第一は「天皇テレビメッセージ」によって二〇一八年天皇代替わりXデーが始まった。「明治一五〇年」記念式典とあわせ祝賀一色の天皇制賛美となる。第二は「おことば」に従い安倍政権は「今の天皇のみ退位を認める特別法」を準備する。天皇の指示で特例法を作るのは「国政に関する権能を有しない」憲法違反だ。第三はアキヒトが護憲天皇、平和天皇という言説がまかり通る。憲法改悪反対や戦争法反対や原発反対の人々まで、デマ宣伝に巻き込まれるのは危険だ。

続いて天野恵一さん(反天皇制運動連絡会)が講演した。まずマスコミの「菊タブー」や「不敬イデオロギー」批判だ。劇作家の山崎正和が雑誌で「天皇に対して公務の削減や縮小をいうのは不敬だ」と書く。自由な作家まで「不敬」などと言う「不敬イデオロギー」は巨大だ。「おことば」を公然と批判するマスコミは

皆無だ。「菊タブー」は強力に生きていく。次に天皇翼賛の政治状況だ。「生前退位」特例法に反対する政党は無い。日本共産党の政治的屈服は大きい。国会開会式の出席を拒否していた日本共産党は、二〇一五年から転向した。「おことば」が「儀礼的・形式的」だから出席して「民主的改革」を目指すという。今回の「生前退位」で法改正を支持する発言をする。さらに、アキヒトの主張する象徴天皇像こそ、立憲主義を破壊し解釈改憲を積み重ねた結果だ。「国事行為」の外に作った「公的行為」という違憲行為を積み上げて常態化し、天皇制を変えてきた。憲法九十九条は「天皇は憲法を尊重し擁護する義務」を課しているが、天皇と政府は違憲行為を重ねた。

また、二〇一八年天皇代替わりは二〇二〇年東京オリンピックと一体だ。昭和天皇の重体化と自粛の強要はソウルオリンピックと重なり、オリンピック宣言は吹き飛んだ。自粛による天皇制批判を「失敗」と総括したアキヒトと政権は、東京オリンピックと天皇の死を切り離すため「生前退位」を画策した。東京オリンピックで新天皇が名誉総裁として開会宣言する。これは国家元首の役割だ。自民党改憲案は「元首である象徴天皇制」だが、アキヒトは既にこの役割を先取りしてきた。

講演の後、質疑討論を経て「二〇一七年退位特例法」「二〇一八年天皇代替わり」と闘っていくことを確認した。

(はんでんの会・兵庫／藤岡)

## 「立憲主義と生前退位」 天野恵一講演会

この日の天野さんの論点は、ひとつは現憲法下の一条から八条の天皇条項において「天皇制」はどのように規定されているのかという「立憲主義」からの論点と、もうひとつはそもそも「人民主権」「基本的人権」「戦争の放棄」を基本とした現憲法下で、矛盾なく「天皇制」が存在することの問題です。

天皇自らの「退位」発言が裏技的にマスコミから流れる背景には、来る二〇年の「めでたい」オリンピックイヤーにもしもの不幸が重ならないかご心配でしょ？という話であるが、「退位を認めるべき」という世論に反し、右派メディアや日本会議は「皇室典範の改正を天皇が提言するなど憲法違反」だと反対している。しかし、「一個の人間を国家の象徴にする」などという特権的奴隸制ともいふべき「象徴天皇制」を拡大解釈してきたことが問題であり、憲法学においても戦前・戦後における「皇室典範」の位置づけを、たとえば「虚器」としてその矛盾を過小評価してきたつけが今に至ったのだという天野さんの指摘は、まだ続くこの「退位」問題を考える際に、忘れてはならない視点であろう。

天野さんのお話は、こうした二つの論点を交互に行き来しつつ、戦後七〇年の間にどのようにこの問題が論じられてきたかという考察を随所に織り込んで、その一方で現憲法下における基本的な要件

「ラジカルな憲法実現からいまだ程遠いではないのか。そのように解釈すれば、おのずと「天皇条項」は不要だという結論に至るはずだ」ということで、本日の演題「立憲主義と生前退位」というテーマに直結したインパクトある講演でありました。(関西共同行動／古橋雅夫)

## 天皇の「象徴的行為」ってなんだ!? 「代替わり」状況のなかで考える

八月八日の天皇明仁のビデオメッセージによって、にわかに「生前退位」問題が浮上した。「生前退位」とは言うまでもなく天皇代替わりである。その「代替わり」に向け、明仁はメディアを通じて国民に語りかけ、国政における法的対応を促した。もちろん、これ自体が違憲行為である。しかも、それは明仁自らが拡大し、推し進めてきた「象徴的行為」を「代替わり」以降も継続し、天皇制を安定的に永続させたいというメッセージだった。そこで本来、国事行為以外を許されない天皇の、「象徴的行為」とは何かを改めて問うべく集会が開催された。

発言者は、浅野健一さん(同志社大学教員)、米沢惠さん(研究者、天野恵一さんの三人。浅野さんは、リベラルとされる朝日、毎日、東京新聞も、こと天皇報道に関しては賛美一色である。しかも、明仁が「護憲天皇」であるとの認識に立って安倍政権と対立しているかのような報道は問題だ。自らの戦争責任に向き合わ

ず、暴走する安倍政治に追従するマスコミの罪は重い、と指摘した。

米沢さんは、国家は象徴を必要とすると同時に宗教性を持つこと、その象徴には常に暴力性がつきまとうことなどを論じた。そして、天皇制に対する国民の無関心が天皇制を廃絶しようとする力に対して強く反発し、無関心なまま天皇制を維持することを強力に求めるという田川建三や、共同性の喪失、個に解体されていく孤立感を埋めるものとして天皇制の宗教性を利用した国民統合が行われているという桑原重夫の論考を紹介し、今なお有効ではないかと提起した。

二人の発言を受けて天野さんは、奥平康弘著「萬世一系の研究」を紹介しつつ、日本国憲法は国民主権、基本的人権の尊重、平和主義の三原理に加え、実は象徴天皇主義の四原理で成立してきた。その象徴天皇主義が三原理を拘束し、内側から腐らせてきたと指摘した。その上で、三原則をきちんと確立する運動が天皇制をなくしていくことにつながると語った。

集会参加者は約八〇人。会場からは質問や意見も出て、熱気あふれる集会だった。(川合浩二)

## 改憲情況の中の「生前退位」——「天皇元首化」とどう闘うか?

静岡の「天皇誕生日」に考える」集会(戦後七一年連続講座・実行委員会主催)が二月二三日、静岡労働会館にて

行なわれた。講師は反天皇制運動連絡会の北野蒼さんで、演題は表題のごとくである。

北野さんは冒頭、一昨年の8・15デモのDVDを上映しながら、「11・20天皇いらないデモ」の圧倒的暴力についても言及（講師自ら物損カンパを呼びかけてくれた）、これら反天運動の具体的天皇体験と「普通の人の」もつ天皇イメージとの乖離をつなぐ回路をどう発見したらよいか、という課題を提起してから本題に入った。以下はその骨子である。

「生前退位」の問題は、老齢の天皇の健康問題などというものではない。8・8メッセージに示されるように、明仁天皇はいまある「国民統合」を受動的に象徴するだけでなく、象徴の行為によって、あるべき「国民統合」を能動的に創り出してきた。横田耕一さん（憲法学者）が批判する通り、このこと自体が全くの憲法違反であるが、一二月七日の有識者会議では、拡大してきたこれらの「公的行為」を追認しただけでなく、「公的行為」の内容さえ天皇が決めてよいという見解を示している。明仁が創り出してきたこのような能動的・積極的な天皇像こそが「元首化」の内実なのではないか。

權威をもって体制を正当化するのが天皇制の役割である限り、天皇制が戦争国家としての日本を正当化する機能を果たすのは当然である。戦争は常に平和の口実で行なわれる。ここが天皇の「平和主義」と安倍の「積極的平和主義」の合流点になるはずだ。「即位・大嘗祭」の政教分離

違反も明らかである。

自民党の改憲案に反対する運動と合流してゆく中で、天皇の「生前退位」、「元首化」と闘ってゆきたい。（議論白熱。割愛！）

（天皇制を考える会（静岡）／山河進）

## 反天日誌

12月4日（日）●「天皇賛歌」にうんざり！

「女性（的）天皇制」の今とこれから（集会報告参照）

12月11日（日）●差別・排外主義に反対するシンポジウム——解消法・川崎・都知事選・山ゆり園事件——現状と課題を考える

12月15日（木）●天皇制を考える市民講座——天皇の「生前退位」を議論しよう（集会報告参照）

12月16日（金）●立憲主義と「生前退位」（集会報告参照）

12月18日（日）●天皇代替わりを撃つ連続講座「退位希望声明」の意味するもの

12月21日（水）●Rio反オリンピック報告「オリンピックの開催都市に何が起きるか？」

12月23日（金）●天皇の「象徴的行為」ってなんだ？——「代替り」状況のなかで考える（集会報告参照）

●改憲状況の中の「生前退位」——天皇元首化とどう闘うか？（集会報告参照）

1月4日（水）●オスプレイ配備撤回！辺野古工事再開を許さない防衛省抗議行動

## 集会情報 INFORMATION

1月17日（火）●キャンドル・アクション JUSTICE for OKINAWA

16時〜署名提出・19時〜キャンドル集会／最高裁判所周辺（地下鉄永田町駅）／呼びかけ：「止めよう！辺野古埋立て」国会包囲実行委員会

1月20日（金）●ドイツの戦後70年・第5回「新左翼と（テロリスト）たちの反体制闘争」

19時〜池田浩士／会場：主催：ピープルズ・プラン研究所（地下鉄江戸川橋駅、03-6424-5748）

1月22日（日）●五輪ファーストおことわり！オリンピックやめろ！デモ

11時30分集合・12時デモ／原宿駅前神宮橋（JR原宿駅ほか）／主催：反五輪の会（<http://hangorin.tumblr.com/>）

●オリンピック災害おことわり！Read i Speak Out

13時30分〜／千駄ヶ谷区民会館（JR原宿駅ほか）／主催：2020「オリンピック災害」おことわり連絡会（080-5652-0270 宮崎）

1月24日（火）●辺野古新基地建設工事再開を許すな！大成建設抗議行動

18時30分〜／大成建設本社前（JR新宿駅西口・新宿センタービル）／呼びかけ：STOP！辺野古埋立てキャンペーン（090-9203-7536 かつう）

1月28日（土）●1960・1970年代運動・思想史第3回「へ平連」と小西反軍裁判

19時〜／古沢宣慶／会場：主催：ピープルズ・プラン研究所（地下鉄江戸川橋駅、03-6424-5748）

1月29日（日）●安倍政権は辺野古新基地建設を断念しろ！新宿デモ

14時集合・15時デモ／アルタ前（JR新宿駅）／主催：辺野古への基地建設を許さない実行委員会（090-3910-4140 一坪反戦地主会関東ブロック）

2月4日（土）●ウォルデン・ベローさん横浜講演会

13時〜／神奈川近代文学館（みらい線元町中華街駅）／4日・5日午前中フィールドワーク、5日午後ワークショップなどあり <https://atastanpeople.wordpress.com/>／主催：同実行委員会

2月6日（月）●安倍靖国違憲参拝訴訟第12回口頭弁論

14時〜（30分前に傍聴券抽選）／東京地方裁判所（地下鉄霞ヶ関駅）

2月11日（土）●天皇制はいらない！「代替わり」を問う反「紀元節」行動

13時デモ・15時討論集会／日本キリスト教会館4F（地下鉄早稲田駅）／主催：同実行委員会（090-3480-0263）

2月18日（土）●「日の丸・君が代」の強制をはね返す 神奈川集会和デモ

13時30分〜／加藤直樹／横浜開港記念会館（みらい線日本大通り駅ほか）／主催：「日の丸・君が代」の法制化と強制に反対する神奈川の会（090-3909-9657）